

PRESS RELEASE

新国立劇場 2024/2025シーズン 演劇
シリーズ「光景—ここから先へと—」Vol.1
〔海外招聘公演〕

母

〈チェコ語上演・日本語及び英語字幕付き〉

チェコ、ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニーが初来日！
まさに現在の世界情勢をうつしとったかのような演出で、国内外で高い評価を得る
カレル・チャペックの名作『母』を新国立劇場で上演！



『母』舞台写真 提供:ブルノ国立劇場

2025年5月28日(水)～6月1日(日) 新国立劇場 小劇場
2025年3月15日(土)10:00～ 一般前売スタート！

【写真・資料のご請求、取材のお問い合わせ】

新国立劇場 制作部演劇 広報担当 杉田亜樹

TEL: 03-5352-5738 FAX: 03-5352-5737

E-mail: sugita_a8863@nntt.jac.go.jp

〒151-0071 東京都渋谷区本町 1-1-1

 **新国立劇場**
NEW NATIONAL
THEATRE
TOKYO

作品について

プラハに次ぐチェコ第二の都市、ブルノにある**ブルノ国立劇場**。新国立劇場と同じ、**オペラ、バレエ、演劇の3部門**を擁した、チェコ共和国最大の劇場のひとつです。ヤナー・チェク劇場、マヘン劇場、レドゥタ劇場というブルノ市内に点在する3つの劇場を運営し、毎シーズン約 20 の新作を上演し、幅広いレパートリーで毎年 70 以上の異なる演目を上演しています。

この度、劇場付きのスタッフ・キャストが所属する「ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニー」を招聘し、2022 年 4 月の初演以来、レパートリー作品として定期的に上演されているカレル・チャペックの名作『母』を、新国立劇場で上演いたします。チェコの国民的作家であり、劇作家、ジャーナリスト、評論家、小説家、童話作家としても活躍した**カレル・チャペック**によって書かれたこの戯曲は、1938 年に初演された約 90 年前の作品です。ブルノ国立劇場 演劇芸術監督ミラン・ショテク氏による、現代劇の上演と共にチェコ演劇の古典作品に現代的なアプローチを続けるという方針のもと、本作は 2022 年 4 月レドゥタ劇場にて**シュチェパン・パーツルの演出**で上演されました。その後もレパートリー作品として定期的に上演され、また国内にとどまらず、イスラエル国立劇場ハビマでも上演、高い評価を得ました。

1936～1939 年に起こったスペイン内戦を受けて執筆された、戦争により夫と息子たちを次々と失くしていく母親の物語は、約 90 年の時を経て色あせず、パーツルの見事な演出と、ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニーのリアリティが溢れる演技で、皮肉にも、まるで現在の世界情勢を今すぐいੱったかのような作品として我々の前に現れます。戦争で夫と息子たちを亡くした母と、亡くなった家族たちの対話劇。**今回が初来日となるブルノ国立劇場ドラマ・カンパニー**による、時に悲痛、時にユーモラスな珠玉の作品をどうぞお楽しみください。

あらすじ

夫をアフリカでの戦いで失ったドロレスには5人の息子がいた。長男は医師として、次男はパイロットとして、それぞれの使命を果たして死んだ。双子の三男と四男は内戦に巻き込まれ、戦いの中で2人も殺される。亡くなった者たちは霊となってドロレスに話しかける。戦火が激しくなり、戦争への参加が呼びかけられる中、唯一生き残っている末息子のトニは軍への入隊を志願し、死んだ父と兄弟たちはトニの決断を応援する。トニまで失う事はできないと必死に抵抗するドロレスだが…。

ブルノ国立劇場 3つの劇場に関する豆知識

ヤナー・チェク劇場

チェコを代表する作曲家、レオシュ・ヤナー・チェクの名を冠した劇場。近代的な建築様式で、オペラとバレエの上演に適しており、完成直後からはブルノ国立劇場のオペラの常設会場となりました。80 年近い建設の準備期間を経て、1965 年 10 月 2 日、レオシュ・ヤナー・チェク作曲のオペラ『利口な女狐の物語』の新演出によるガラ公演で一般公開されました。収容人数 1,155 席。



Photo by Marek Olbrzymek

マヘン劇場

作曲家レオシュ・ヤナー・チェクの最盛期の作品の数々が初演された劇場です。そしてヨーロッパで初めて電気による照明設備が導入された劇場でもあります。この目的のために、劇場内には小さな蒸気発電所が設置されたのですが、設計者はなんと、かの有名なトーマス・エジソンでした。また、映画「のだめカンタービレ 最終楽章 前編」のロケ地として使われたことも！



Photo by Marek Olbrzymek

レドゥタ劇場

中央ヨーロッパで最も古い劇場建築物。17 世紀初頭に建てられ、後にパブへと改築され、演劇組合の集会所として利用されました。数世紀にわたる数多くの改修工事を経て、現在の姿になりました。1767 年には 11 歳のヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが姉ナンネルとともにここでコンサートを行いました。演劇公演は、マヘン劇場とレドゥタ劇場で上演されており、『母』はレドゥタ劇場で初演され、現在もレパートリー作品として上演されています。



Photo by Marek Olbrzymek

チェコ上演時のレビュー① ※参考資料:文章の引用・抜粋はご遠慮ください

劇場の上演計画は事前に作成されるため、時事問題に対応することは通常不可能なはずです。しかし、今回ブルノ国立劇場がカレル・チャペックの反戦劇『母』をレドゥタ劇場で上演することは、本当に的を射ていました。劇が後半に差し掛かるにつれ、ロシアの隣国への侵攻との類似性は避けられません。

観客は特に、チャペックの戯曲であるはずの軍の侵攻を伝えるテレビのニュース報道と、数日前に観たウクライナの戦場からの報道を重ねざるを得ません。

1938年に書かれた作品であるにもかかわらず、シュチェパーン・パートル演出のこの公演は、現代化させたのは、家具や、コルネル(ヴォイチェフ・ブラフタ)とペトル(ヴィクトル・クズニーク)の兄弟の喧嘩(進歩主義者と伝統的価値観の擁護者の間の対立に変わっている)などの細かい部分だけです。人類の暴力に対する関心は、アントニーン・シラーが手掛けた舞台美術からわかります。彼は「父親」の部屋を、原始人のマチェーテや盾から機関銃、現代のロケットまで、あらゆる種類のものが揃った軍事博物館のようにしました。

チャペックの台詞は時々古典的であると言われますが、ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニーの俳優たちはこの難しい台詞を難なく扱っています。最も重要な「母親」を演じるテレザ・グロスマノヴァーは、主役として、狂気、誤解、そして根源的な悲しみの間でバランスを取る女性を演じきりました。彼女は強い感情と静かな絶望の瞬間を交互にリアリティがある演技で表現しています。父親役のトマーシュ・シュライは、セリフを少し時間的に離して表現し、ブラックユーモアが生まれる機会を与え、戦争の不条理さをさらに際立たせるという素晴らしい演技を見せています。

私は公開リハーサルでこの作品を見ましたが、その段階でさえ、とても強い印象を受けました。

2022年10月4日 Nadivadlo – Lukáš Dubský 著



『母』舞台写真 提供:ブルノ国立劇場

チェコ上演時のレビュー② ※参考資料:文章の引用・抜粋はご遠慮ください

カレル・チャペックによって書かれた『母』は、この1月で84歳になりました。ブルノ国立劇場はこの作品を上演作品に選びました。リハーサルが始まった時期は、ロシアの侵略者がウクライナを攻撃した時期と偶然にも重なりました。私たちの国に避難してくるウクライナ難民に加えて、そこで起こっている戦争の惨状に関する報告や写真が届き始めました。そして、第二次世界大戦の直前にファシズムの台頭の中でチャペックが書いた非常に強力な反戦劇について語る際に、現在の戦争を考慮に入れないということは不可能でしょう。

「チャペックが80年以上前に紙に書いたものと同じ内容が、CT24のライブニュースで語られていました。」と、演出家のシュチェパーン・パートルは述べ、さらに「『母』のリハーサル中、突然、一行も解釈する必要がなくなりました。ウクライナの戦争がすべての作業をしてくれたのです。」と付け加えました。

2022年4月のレドウタ劇場の雰囲気は、1938年1月にブルノとプラハで初演された時と同じくらい強力なものでした。チャペックの天才的な戯曲は、金曜日の初演で大きな印象を与えました。セリフの合間にピンが落ちる音が遠くからでも聞こえるような緊張感が漂いました。

夫と4人の息子を失った母親。自国が侵略を受け、子供たちが殺されたという知らせを受けた彼女は、爆撃された学校に身を置き、自身の末息子さえも戦争に送り出します。その物語は、観客に耐え難いほどの恐怖を感じさせるほど共鳴しました。この公演の成功は、パートルの非常に厳格で理にかなった演出と、テレザ・グロスマノヴァーによる、現代的で自然な、だからこそ非常に説得力のある演技によるものです。彼女は、人生で大きな試練を受けた母親を、哀れな人物としてではなく、神経質で、体力と精神の限界に達している、極めて悲惨な状況に置かれた普通的女性として演じています。素晴らしい共演者たちも、まるで、この恐ろしく現実的な作品を最後までやり遂げると同じ責任を感じているかのように、彼らは皆、彼女にとって素晴らしい息子たちでした—彼らの死の前も、後も。戦争で拷問死した夫役のトマーシュ・シュライの演技も、飾り気がなく、非常に現実味がありました。

もし観客が『勇氣』があるなら、レドウタ劇場に来て、この現実の完璧な描写がどのような影響を与えるかを見るべきです。私たちの誰もが想像できない現実がそこにはあります。

チャペックという先見の明を持つ作家は『母』について次のように語っています：

「筆者にはただ一つの願いがある。それは、二度とこんな作品を書くことがないこと。しかし、それは作者の意のままにはならない。それは私たちが生きる時代次第だ。」

2022年10月4日 Mladá fronta – Jana Soukupová 著



『母』舞台写真 提供:ブルノ国立劇場

スタッフプロフィール

【作】 カレル・チャペック Karel ČAPEK

カレル・チャペックはチェコスロバキアを代表する小説家、劇作家、物語作家、コラムニスト、フランス詩の翻訳家。チャペックの劇作は、演出家及び劇作家として活躍した 1920 年代に始まる。彼の戯曲『R.U.R. - Rossum's Universal Robots』(20 年)は、「ロボット」という言葉を世に知らしめた近未来 SF であり、『マクロプス家の事件』(22 年)は、後にモラヴィアの作曲家レオシュ・ヤナーチェクが音楽を手がけた。

1930 年代初頭、カレル・チャペックはジャーナリズムと小説の執筆に専念した。劇作家としての活動を始めたのは 1930 年代後半になってからで、38 年 12 月 29 日にハビマで初演された『白い病』(37 年)と、39 年 12 月 3 日にハビマで初演された『母』(38 年)を、ズヴィ・フリードランド演出のもとハンナ・ロヴィナ主演で発表した。

25 年、チャペックは国際ペンクラブの一部としてチェコスロバキアペンクラブを設立し、数年にわたり同クラブを主宰した。

カレル・チャペックは、芸術家であり、人文主義者であり、哲学者でもあるという多才な個性を、その著作のすべてにおいて発揮している。第二次世界大戦の間、チャペックは若きチェコスロバキアの機知に富んだ精神の一人であった。38 年 12 月、彼はインフルエンザに罹り、急性腎炎と二重肺炎になった。チャペックは 38 年 12 月 25 日、ナチス・ドイツによるボヘミアとモラヴィア占領の数ヵ月前に肺水腫で死亡した。

【演出】 シュチェパーン・パーツル Štěpán PÁČL

チェコ共和国・ブルノ国立劇場専属演出家。プラハで生まれ、舞台芸術アカデミー演劇学部を卒業。2007 年から 13 年にかけてフリーランスの舞台演出家として活動し、13 年にオストラヴァのペトル・ベズルチ劇場の芸術監督に就任。15 年から 17 年にかけては、プラハ国立劇場の専属演出家を務めた。

19 年 9 月にブルノ国立劇場に入団して以来、チャーホフの『かもめ』(20 年)、オールビーの『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』(21 年)、シェイクスピアの『十二夜』(22 年)などを演出。『十二夜』はポーランドのグダニスクで開催される国際シェイクスピア・フェスティバルに招待されている。

世界的に有名な古典戯曲に加え、パーツルは、22 年にブルノで上演され大成功を収めた彼の傑作『母』(カレル・チャペック作)など、チェコの戯曲にも力を入れている。また、プラハとブルノの舞台芸術アカデミーで演技と舞台演出を教えている。





シリーズ **光景** ここから先へと

海外招聘公演 **母** チェコ語上演

作●カレル・チャペック
演出●シュチェパーン・パーツル
制作
ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニー

2025 5月28日 WED → 6月1日 SUN

New National Theatre, Tokyo
2024/2025 SEASON

DRAMA

母さんにはわからない...

どろせ

私にとっては大事なことでよ

どんなに小さなことだって

公演概要

シリーズ「光景—ここから先へと—」Vol.1 海外招聘公演『母』

〈チェコ語上演／日本語及び英語字幕付〉

【作】カレル・チャペック

【演出】シュチェパーン・パーツル

【ドラマトウルグ】ミラン・ショテク

【美術】アントニーン・シラル

【衣裳】ズザナ・フォルマンコヴァー

【音楽】ヤクブ・クドラーチュ

【英語字幕翻訳】ヤロスラフ・ユレチュカ マルチナ・ナーフリーコヴァー

【日本語字幕翻訳】広田敦郎

【舞台監督】八木清市

【技術監督】友光一夫

【制作】ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニー

【出演】ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニー

テレザ・グロスマノヴァー、トマーシュ・シュライ、ロマン・ブルマイエル、マルチン・ヴェセリー、
ヴォイチェフ・ブラフタ、ヴィクトル・クズニーク、パヴェル・チェニェク・ヴァツリーク

【芸術監督】小川絵梨子

【会場】新国立劇場 小劇場

【公演日程】2025年5月28日（水）～6月1日（日）

※開場は開演の30分前です。

【料金（税込）】

A席7,700円 B席3,300円／Z席（当日）1,650円

【一般発売】2025年3月15日（土）10:00～

【チケット申し込み・お問い合わせ】

新国立劇場ボックスオフィス TEL: 03-5352-9999（10:00～18:00）

新国立劇場Webボックスオフィス <https://nntt.pia.jp/>

* **Z席1,650円** Z席は、公演当日朝10:00から、新国立劇場Webボックスオフィスおよびセブン-イレブンの端末操作により全席先着販売いたします。
先着販売後、残席がある場合は、公演当日朝11:00からボックスオフィス窓口でも販売いたします。※電話予約不可。

* **当日学生割引** 公演当日残席がある場合、Z席を除く全ての席種について50%割引にて販売。要学生証。電話予約可。

* **各種割引** 新国立劇場では、高齢者割引（65歳以上5%）、障がい者割引（20%）、学生割引（5%）、ジュニア割引（小中学生20%）、アトレ会員割引（5～10%）など各種の割引サービスをご用意しています。

関連イベント

<ギャラリープロジェクト>トークセッション 演劇嘶Vol.20 ブルノ国立劇場とチェコ演劇

ブルノ国立劇場の3部門を統括するゼネラルディレクター、マルチン・グラセル氏や演劇部門の芸術監督 ミラン・ショテク氏らが登壇するトークイベント。

ブルノ国立劇場の特徴や現監督のもとでの方針、また最新のチェコの演劇事情についてもご紹介いただきます。

- 日時 2025年5月29日(木)18:30開演(約90分を予定)
- 会場 新国立劇場 小劇場
- 出演 マルチン・グラセル(ブルノ国立劇場 ゼネラルディレクター)
ミラン・ショテク(ブルノ国立劇場 演劇芸術監督)
シュチェパーン・パーツル(『母』演出家)
ラジム・ドランスキー(ブルノ国立劇場 国際連携責任者)
- 進行役 小川絵梨子(新国立劇場 演劇芸術監督)
- 料金 無料・自由席(要予約)・先着順
※どなたでもお申込可能です。
- 申込受付期間 2025年3月21日(金)12:00～5月28日(水)23:59

今後のシリーズ「光景—ここから先へと—」作品

シリーズ「光景—ここから先へと—」Vol.2 『ザ・ヒューマンズ—人間たち』



劇作家・脚本家として活躍するスティーヴン・キアラムのヒット作、『ザ・ヒューマンズ—人間たち』。マンハッタンの老朽化したアパートを舞台に、感謝祭を祝うために集まったある家族の会話から、貧困、老い、病気、愛の喪失への不安、宗教をめぐる対立などが浮かびあがる一夜の物語です。



公演期間:2025年6月12日(木)～29日(日)
会場:新国立劇場 小劇場

作:スティーヴン・キアラム 翻訳:広田敦郎 演出:桑原裕子
出演:山崎静代、青山美郷、細川 岳、稲川実代子、増子倭文江、平田 満

シリーズ「光景—ここから先へと—」Vol.3 『消えていくなら朝』



すべての出演者をオーディションで決定するフルオーディション企画第7弾。2018年に蓬萊竜太が新国立劇場に書き下ろした、家族と距離を置いていた劇作家の「僕」とその家族を巡る一晚の物語。最も身近で最も厄介な「家族」という存在を描いた本作を、蓬萊竜太自身が演出を手がけます。



公演期間:2025年7月10日～27日
会場:新国立劇場 小劇場

作・演出:蓬萊竜太
出演:大谷亮介、大沼百合子、関口アナン、田実陽子、坂東 希、松本哲也